

大戸千之著

『歴史と事実』

——ポストモダンの歴史学批判をこえて——

阿部 拓児

書評

歴史家の営みとは、つまり「歴史を書く」とは、本来どうあるべきなのか。それは、過去の事実を再構築し、そこに潜む因果関係の糸をたぐり出すことである。とりあえずは、こう述べて差し支えないのではないか。そして、この作業が正當な手続きを踏んでなされている限り、それは歴史家の独りよがり陥ることはなく、時間や空間にとらわれずに不特定多数の人びとによって等しく共有される。かつて、このようなバラ色のヴィジョンが描かれていた時代があったことも確かであろう。しかし、前世紀後半に吹き荒れた、ポストモダニストらによる歴史学批判の嵐は、一時期は歴史研究の存在意義を根本から揺るがした。いわく、客観的な過去など幻想に過ぎず、したがってきわめて主観的な叙述をなしてきた歴史家は過去の欺瞞を認め、小説家としての腕を磨くべきである、と。今世紀に入って、この論争はいったん落ち着いたかのように見える。ただし、それは問題が解決されたことを意味してはいない。互いが納得しないままに放置されているに過ぎ

ない。この問題は曖昧なままに残してよい性格のものではなく、今一度、歴史家の立場からきちんと発言がなされてしかるべきである。

本書は以上のような決意から、長年プロの歴史家として大学に奉職してきた著者が、「歴史を書く」ことの可能性をあらためて問うものである。しかし本書には、一般のポストモダン論争の書物とは大きく異なる特徴がある。上述の問いに著者は、古代ギリシアの歴史叙述のあり方を検討することによってアプローチするのである。これは一見すると「迂遠で場違いな方法」(二二頁)ともとられかねない。しかし、このような著者の方法を下支えるのは、著者本来の専門が古代ギリシア史にあるという「地の利」だけではなく、「歴史学の基本的な問題は、古代ギリシアにおいてすでにそろそろついている」(二九六頁)という著者の信念である。この考えのもと、本書はまずヘロドトス、トゥキュデデス、ポリュビオスら、三人の歴史家の歴史叙述にたいする姿勢を再検討し、そのちに近代歴史学をめぐる諸問題へと立ち帰る、という構成をとる。以下では、まず本書の内容を、そのメイン・ラインが浮かびあがるような「筆太の輪郭」(これは、著者がトゥキュデデスの歴史叙述にたいして用いた表現である)をもつて描き出そう。

本書で著者は、歴史叙述にとって必要な要素は主体性と批判的姿勢であるという。したがって、王の事績を無批判に記録する『書経』『春秋』、あるいは匿名のまま叙述された『旧約聖書』の記述などは、歴史叙述の名に値しない。古代ギリシアにおいては、

前六世紀に「ミレトスの人ヘカタイオスはかく語る」という一節により叙述の主体を高らかに宣言したヘカタイオスに、その二つを同時に見出せるであろう。彼の批判精神は、残念ながら、時代（年号）や数値の修正程度であり、本質的な領域にまでは届かなかったとはいえ、ヘカタイオスがのちのヘロドトス誕生への地ならしをしたことは間違いない（第一章「歴史叙述の起源」）。

ヘロドトス『歴史』の書き出し、「本書は、ハリカルナッソス出身のヘロドトスが、云々」からは、確かにヘカタイオス以来の「主体性と責任の所在」（五四頁）の意識を読み取れる。さらに、「ギリシア人や異邦人（バルバロイ）の果した偉大な驚嘆すべき事蹟の数々も、やがて世の人に知られなくなるのを恐れて、みずから研究調査したところを書き述べた」と、執筆の目的を続ける彼の史書は、歴史叙述の名にじゅうぶんに値するものである。ヘロドトスの特徴として、叙述の舞台裏、すなわち過去を再構築する過程を読者に隠さないという点があげられる。すなわち、情報の出所を明らかにし（「ペルシア人によれば」「エジプト人によれば」など）、それを読者の前でクロスチェックして見せ、ときに最終的な判断を読者にゆだねることすらもあるのだ。このように情報を吟味する彼の姿勢は、たとえ本人に「歴史を書く」という自覚が明確ではなかったとしても、「歴史学の誕生を告げるもの」（八六頁）と見做してよからう（第二章「ヘロドトス——事実とは情報である」）。

一方、ヘロドトスと双壁を成す古代ギリシアの大歴史家、トゥキュデデスの場合はどうであったのか。かつてトゥキュデデスは、「歴史の父」ヘロドトスにたいして、「実証的歴史学の父」

「科学的歴史学の祖」と呼ばれた時代もあった。しかし近年ではむしろ、ペロポネソス戦争を一大歴史ドラマのごとくにとらえ、「筆太の輪郭」（主体的な情報の取捨選択）による歴史叙述をなした人物であったと、その評価が変化してきている。そして著者も、この筆致こそがトゥキュデデスをして「真実」、すなわちものの実像を訴えかける歴史家へと高めたと見る。

過去の再構築の問題に目をむけると、ヘロドトスが情報を吟味する様子を公表していたのとは異なり、トゥキュデデスはニユース・ソースや検証過程を読者に教えてくれない。トゥキュデデスと事実をめぐる、これまでとりわけ問題とされてきたのが、彼の史書のじつに五分の一強を占める「演説」の箇所である。これら「演説」のなかには、明らかに彼自身が耳にすることができなかったものや、史家の脚色・改変が加えられているものがある。著者はこれを、トゥキュデデスの「創作」として排除すべきではなく、「真実」を生き生きと伝えるための表現方法（一種の弁論術）として理解すべきであるという立場をとる。この点、トゥキュデデスは実証主義的な歴史学を目指したランケよりも、じつはポストモダン主義の旗手、ヘイドン・ホワイトに通じる歴史家だったと言えるのかもしれない（第三章「トゥキュデデス——事実とは解釈である」）。

本書でメインにあつかう最後の歴史家はポリュビオスである。彼はアカイア連邦の有力政治家の息子として生まれ、ローマ帝国の要人のもと人質として過ごしたという自らの経験を活用し、のちに政治家を志す人間にとって「実践に役立つ歴史」（一一五頁）の叙述を目指した歴史家であった。ポリュビオスの歴史書には

「真実」という語が頻出して来るが、これを用例分析にかければ、「事実がどうであつたか」(二〇一頁)が、ポリュビオスの「真実」になるという。ここに、実地経験に裏打ちされた「正確さ」にたいする史家の自負が垣間見えよう。正確な事実を重んじるといふ点では、従来「実証史学の父」とされてきたトゥキキュデイスの後継者と見做すこともできよう。しかし、その一方でトゥキユデイスにはなり切れない(なりたくない)ポリュビオスの姿も見落としてはならない。それは、とりわけ文体の面に現れる。ローマ時代の文芸批評家、ハリカルナッソスのディオニュシオスは、『文章構成法』(四・一五)のなかで、「最後まで読み通すに耐えないような著作を世に残し」た歴史家として、ポリュビオスの名をあげる。彼自身も、トゥキユデイスのようににはなりたくないという意識をのぞかせており、演説の能力を誇示することこそ史家の務めとする見解を表明し(『歴史』三二六・一・一一七)、「演説」のなかにフィクションの要素を導入したトゥキユデイスを暗に批判するのである。以上のように、ポリュビオスは事実を懸命に語ろうとする姿勢を見せる一方で、文学としてのレヴェルの低さ、あるいは文体の生彩さを欠いた歴史叙述をなした歴史家でもあつたのだ(第四章「ポリュビオス——事実の正確な理解を」)。

第五章「循環史観」という神話」は、前章のポリュビオスの歴史観から派生した章であり、著者自身が「本書のメイン・ラインからは少しはずれるけれども」(二〇七頁)と述べているように、歴史叙述と事実のあり方とは直接関係しない。したがって、

ここでも詳しくは紹介しないが端的にまとめるならば、本章の目的は「古代ギリシア人は、歴史を循環すると考えていた」とする想定、すなわち「循環史観」を論駁することにある。

以上、三人の歴史家の事実にたいする姿勢を検討したのち、第六章「ランケの歴史学とその後——事実とは史料である」で、近代歴史学以降の歴史叙述と客観性をめぐる問題へと再び帰る。この章には本書のエッセンスが凝縮されており、したがって、ここでもやや詳しく紹介しておく必要がある。まず著者は、客観的事実を重視し史料批判を確立した「ランケの」歴史学成立の過程および学問としての歴史の成立について回顧する。ランケが活躍した一九世紀から、二〇世紀前半にかけて、誰にとっても客観的な歴史学は存在するという「楽観的な空気」(二四〇頁)が支配した時代があつたが、第一次大戦を経験したのち一九三〇年代には早くもその行き詰まりが感じられていたという(「1 客観的歴史学の成立とその問題点」)。その後著者は、ポストモダニストらによる伝統的歴史学にたいする批判をまとめ、しかしそこには歴史学にたいする誤解があつたと指摘する。すなわち、ポストモダニストらが批判する、歴史学における「ありのままの事実」を書くこと、とは「過去の事実をそのまま」説明すること、ではなく、「根拠のない作りごと」は語らない、「史料的な裏づけをしなから語る」という意味であつたはず、と反論するのである。とくに著者は、ポストモダニストらによる客観性の否定が、学問の世界に無秩序な状態を生み出してしまふ可能性を危惧する。歴史を学問として成立させるためには、論理・解釈の絶えざる吟味、すなわち最大多数にとつての最大限の共通理解を得られるように努

力するしかない、と著者は主張するのだ（2 克服への道の模索）。ポストモダンストラがしばしば指摘する、歴史と文学作品（小説／フィクション）との類似性については、著者はむしろ相違点もきちんと認識する必要性があると論ず。すなわち、「歴史研究の場合には、あくまで事実をふまえることに、こだわらなければならぬ。裏づけとなる史料がある、ということが肝要」（二七四頁）なのである（3 歴史とフィクション）。

以上の諸章を経たのち、いま歴史研究者に「何が可能か」（終章）と問われたとき、著者は想像力を働かせながら工夫した「語り」をしつつも、あくまで史料（根拠）にもとづく叙述を目指すべき、との意見をあらためて表明するのである。

以上が本書の概要である。本書を手にした読者ならばだれしもが、非常に難解なテーマをなるべく広範な読者層に訴えるべく、可能な限り噛み砕いた労作、という感想を抱くであろう。しかし、ここでは本書の前提に関わって、以下に二つの論点を提示したい。著者は、本書「序章」の四頁で次のように述べる。「二〇世紀の後半、とくに八〇年代から九〇年代にかけて大きな論議を呼んだ歴史学批判、一般に「言語論的転回」、「ポストモダンニズム」、「ポスト構造主義」と呼ばれる議論（以下「ポストモダンニズム」で代表させる）のなかで提起された伝統的歴史学に対する批判について、ふりかえるところから話をはじめたい」（傍線は引用者による）。そして、同じく序章、「言語の可能性と限界」（七—九頁）の段では、ソシュールの記号論やデリダの「テクストの外には何もない」という有名な句を紹介しつつ、ポストモダンと歴史

学をめぐる問題の一端は言語およびテクストの可能性にあると指摘する。これらを読む限り、著者が本書で対峙すべきポストモダンストラによる伝統的歴史学批判とは、すなわちテクストおよびテクスト・クリティックに基づく歴史叙述であると了解されるのである。

しかし、それ以降の三人の歴史家をあつかう章では、著者は次のようにも述べているのである。やや長くなるが、重要なポイントになるので、そのまま引用しよう。「しかし、ここで注意しておかなければならないことがある。それは、ヘロドトスのみならず、次章以下でとりあげるトウキユディエスやポリュビオスの仕事についても同じなのであるが、彼らが研究調査しようとしたのは、今日いう「同時代史」、つまり自分たちと同時代の歴史であり、当事者や関係者がまだ多数生存している出来事の歴史なのだ、ということである。（中略）古代ギリシアにおいて同時代史を書くこととすると、情報の中心となるのは事情を知った人間による証言であつて、文書や記録・報告の類から情報を得るケースは少ない。わたしたちが歴史研究について論じようとするとき、方法論的議論の中心をなすのは文献批判や文書批判であろうが、古代ギリシアの歴史叙述においては、そうしたことは第一義的問題とはならない」（五九—六〇頁、傍線は引用者による）。つまり著者は、本書がとりあげる古代ギリシアの歴史家たちは「文献批判や文書批判」によらずに、「わたしたちが普通考ええる歴史」（一四—三頁）を書いていたわけではないと言っているのである。むしろ、その素材（テクストからの情報／目・耳によつて集められた情報）の如何にかかわらず、すでに発生してしまつた出来事Ⅱ「過去」

を再構築するという点では両者に共通項を見いだせるかもしれない。しかし、文献史学と「体験史学」とでは、その際にとられる手続きは大きく異なるであろう。本書は「歴史学の基本的な問題」は、古代ギリシアにおいてすでにそろっている」ことを前提とするが、ポストモダニストたちによる歴史学批判にたいし古代ギリシアにおける史学思想の考察が真に有効である、という図式に説得力を持たせるためには、もう一段階の説明が必要となったのではないかと思われるのである。

なお、じつは古代ギリシア史家のなかにも、文献にたよった、われわれに近いかたちでの歴史学を目指した人物もいることを忘れてはならない。紀元前一世紀のシチリアの歴史家、ディオドロスは一般には「糊と鉄の歴史家」と揶揄されるように、史家自身のオリジナリティはまったく持たない、史学史研究上考慮するに値しない歴史家と考えられてきた。しかし、彼の歴史書を読むと、このようなイメージは再考すべきと評者には思われる。彼の歴史書「序文」の一節、「つぎには、わたしどもが提起した主題〔引用者注…世界史の叙述〕にふさわしい資料をローマが提供してくれる、という便宜を得た。この市は、その勢威をもつて人の住む世界の最果てへ向け広がるほど、際立った存在である。わたしどもはこの市に大半の時を過ごし、その間この市からさまざまな基礎資料を、この上なく容易にしかも最も多く、提供してもらった」(『世界史(神代地誌)』一・四二—三、飯尾訳)は、文献収集のために、ヨーロッパの「本場」に通う日本の西洋史研究者の姿を彷彿とさせるであろう。さらに、「メディア族の最大の弱権をめぐっては、一番古い時代の諸史家の間で異論が生じている。

だから、わたしどもが考えるところでは、真実を求めて過去の事項を歴史に書き止めようとする人びとにふさわしい仕事は、歴史著作相互の喰い違いをはつきりさせることである」(『世界史(神代地誌)』二・三二—一、飯尾訳)と述べたときの史家の仕事ぶりは、われわれが空調の効いた書齋でおこなっている作業と、驚くほど重なるのである。本書が、ディオドロスのような歴史家の事実にたいする姿勢を分析したとしたら、ポストモダニストらによる批判にたいし、また別の有益なヒントを見いだせたのではないだろうか。

もうひとつの論点も、先の第一の点につながる。本書最後の節は、歴史とフィクションの関係について問うている。ここで著者は、小説家による過去の再構築にたいする注目すべき事例として、主にトルーマン・カポーティの『冷血』とウォレス・ステグナーの『安息角』の二作品をとりあげる。しかし、ここでもやはり彼らがあつかった事件——『冷血』は二人組の強盗による一家虐殺事件、『安息角』はごく平凡な一生を送った主婦の心の葛藤——は、ともに作家の同時代の出来事であり、われわれは通常それらを歴史と呼ぶことはない。同時代をあつかうということは、同時代人としての共感——むしろ普通に生活している人びとが、『冷血』の主人公である残虐非道な殺人犯の思考に共感することは難しいといえ——、あるいは同時代人にのみ許される、感情の壁への侵入を可能とすることを意味しよう。じつは西洋古代史の分野でもここ数年、プロの歴史家(大学で専門技術の訓練を受け、大学に勤める歴史研究者)による、フィクションの力を借りて生き生きとした歴史叙述を目指す、野心的な試みがなされている。

例えば、周藤芳幸『物語 古代ギリシア人の歴史』（光文社、二〇〇四年）は、「学生たちに、さらにはより広い読者の方々に、古代ギリシア人の生き生きとした世界とその歴史に触れる機会を提供していく」（二七七頁）べく、史料をもとにした「物語」（歴史小説）とその「解説」を交互に織り交ぜながら、古代ギリシア史を紹介した。また、本村凌二『帝国を魅せる剣闘士』（山川出版社、二〇一一年）は冒頭で、「剣闘士ミヌキウスの手記」なる新史料（実際には存在しない、本村の手による創作史料）を「発見し」訳す、という体裁を装って、剣闘士の世界を生き生きと描き出したのである。その一方で、「過去を生き生きと表現して見せること」と「過去の人物に感情移入すること」を安易に混同することにはたいする懸念も出されていることに注意しておきたい。^①歴史叙述の工夫としてフィクションの力を借りるべきか否かについて、ここで評者の意見を述べることは控えるが、対象とする人物の感情の襲への侵入がかなわない、われわれが普通「歴史」と呼ぶような時代をあつかう歴史叙述と、それとは異なる同時代の事件をあつかった作品との間には、やはりひとつの区切りを設けて論じられるべきではなかったのだろうか。とりわけ、本書がとりあげた二作品に代わる、優れた「歴史」小説を選び出すことは、さほど困難なことではなかったと推測されるのであるから。^②

最後に、確認の意味を込めて、やや細かい点について記しておきたい。本書は難解なテーマを「可能な限り噛み砕いた」労作、と先述した。文章は非常に読みやすく、趣旨を理解しにくい箇所もほとんど見られない。しかし、「ついでながら、historia につ

うギリシア語の語根は *wid-, *weid-, *woid- で、「見る」、「見て知る」の意味であった」（六〇頁）という一文だけは、一、二度読んだだけではなぜそうなるのか理解できなかった。おそらくは、historia を原印欧語 (Proto Indo-European language) に直した場合、その語根が *wid-, *weid-, *woid- であったということだと評者は理解したが、それで正しかったのであろうか。今少しはいないな解説が欲しかったところである。

① 藤井崇（二〇一二）「書評：本村（二〇一一）『西洋史学』二四五、四三―四五頁。

② 一例として、東北大学大学院で西洋史学を専攻した佐藤賢一による諸作品をあげたい。佐藤は、『傭兵ビエール』『双頭の鷲』などの百年戦争を舞台とした歴史小説を発表する一方で、『英仏百年戦争』（集英社、二〇〇三年）では、歴史としての百年戦争を解説する。同一の著者による歴史小説と歴史叙述の差を分析することは、歴史とフィクションの関係を考察する上で有効な視点をもたらしただろうと想像される。